

あとがき

本書は、二〇〇七年三月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士学位申請論文を加筆修正したものである。私が北部エチオピア史研究に足を踏み入れる契機となったのは、東京大学に入学してすぐに部勇造教授の『エリュトラ海案内記』に関する講義を受講したことであった。『エリュトラ海案内記』とは、一世紀にエジプト在住の商人が著した紅海とインド洋の商業案内書である。私はそこに含まれていたエチオピアのアクスム王国についての記述に惹かれ、また詳細で専門的な部教授の解説に圧倒された。そのため文学部への進学に際して東洋史学を選択し、部教授のご指導を仰ぐことにした。

その後私が研究対象として選んだのがソロモン朝エチオピア王国である。ソロモン王の末裔と称する「諸王の王」が君臨し、独自のキリスト教文化が栄えたこの異色の王国は、サハラ以南のアフリカにおいては例外的に文字記録による研究が可能なおとと相まって、私にとって魅惑的な研究対象であった。しかしこの王国の歴史研究に用いることのできる文献の数は乏しく、それらが伝える情報は断片的である。これらの極めて限られた情報に基づいて研究を続けることは苦闘の連続であった。研究に行き詰って筆が止まることはしばしばであり、いつしか私は書き残したい論文だけでも完成させ、いつ研究をやめざるを得なくなっても後悔が残らないようにしようと考えようになった。不思議なもので、これが学術雑誌に投稿する最後の論文と思いついて書き始めると、雑念は霧消してただ純粹に論文を書くことができる喜びを感じて筆が進むようになった。その結果なんとか博士学位申請論文を提出して博士号を取得し、さらに本書の刊行に至ることになった。

ここまで辿りつく原動力となったのは、周囲の方々よりすばらしい薫陶を受けたことである。私が東京大学文学部に

進学して以来、部教授には身をもって研究者としてのあるべき姿を示していただき、また研究の深淵さを教えていただいた。教授のご指導がなければ今の私はなく、教授が理想となさる研究レベルに一步でも近づきたいという思いがここまで私を駆り立ててきた。また私の周囲には不遇な状況にあっても疾風の中の勁草のごとく凜として研究に精進する方々が多数いらつしやつた。そのような方々を間近に見ることができたおかげで、私は挫折しそうになる度に自らを叱咤し、研究を続けることができた。幸い私は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に職を得て、研究活動を続けられることになった。今後も部教授をはじめとする方々に教えていただいた研究に対する姿勢を貫き、また「最後の論文」を書いていた時の清冽な思いを忘れずにいようと思う。

この「あとがき」を書きつつ、現在に至るまで自分の研究が多くの方々に支えられてきたことが思い起こされ、感謝の念に堪えない。とりわけ私のような不肖の教え子に対して粘り強いご指導を続けて下さった部教授には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。今回これまでの研究成果を一冊の研究書として公表できることもさることながら、本書の刊行が部教授のご退官に間に合ったことが何よりも喜ばしい。

二〇〇九年九月

石川 博 樹